

昭和戦前期小学校における 特別学級と通常学級との教科目指導内容の比較

—田村一二の精神薄弱教育実践をもとに—

○一木亮太

米田宏樹

(墨田特別支援学校)

(筑波大学人間系)

KEY WORDS: 昭和戦前期 教科目指導内容 田村一二

I. はじめに

インクルーシブ教育システムの中では学びの連続性が課題となっており、知的障害教育課程をどのように位置付けるのかを検討することが必要不可欠である。知的障害教育教科としての枠組みが成立する以前の実践は、国定教科書による教科の枠組みの中から生み出されており、戦前から精神薄弱児教育と通常教育において教育内容に連続性のある実践が展開されたことが考えられる。そこで、知的障害教育課程の位置付けを検討する上で、知的障害教育における教育内容・方法が通常教育の教育内容・方法にどのような共通性や独自性を持って蓄積されてきたのかを検討することが重要であると考えた。戦前に特別学級の担任として精神薄弱教育に従事した人物として、京都市立滋野尋常小学校特別学級の担任であった田村一二(1909-1995)が挙げられる。田村が自身の教育実践を世の中に紹介した一連の資料は、戦前の特別学級における実践の貴重な資料とされている(杉田, 1968; 藤波, 1988, 山田, 1987)。本研究では、田村一二の精神薄弱教育と通常教育における共通性と独自性を明らかにすることを目的とする。本研究は歴史的研究であり歴史的用語を使用する。

II. 昭和戦前期の京都市における通常教育

昭和期の小学校制度は、第三次小学校令のもと行われており、その教育は、修業年限6年間の尋常小学校において行われていた。教科の種類は、「修身」、「国語」、「算術」、「体操」、「日本歴史」、「地理」、「理科」、「図画」、「唱歌」、「手工」、「裁縫」の合計10教科で教育実践が行われていた。各教科の内容を整理すると、修身科では様々な教材を通して道徳性を培うことが指導されていたが、特に偶発事項を取り扱い指導することで、指導内容が児童の生活から遠ざかることのないように指導する等、児童の生活に関連して指導を行うことが留意点として重視されていた。算術科における目的は、日常生活に必要な知識の教授・日常計算の習熟、数学的思考及び能力を啓発することであった。そのため指導項目は、社会に出て必要となる知識が取り扱われ、卒業後の生活を見通して必要な知識が内容として取り扱われていた。手工科の指導内容は高学年になるにつれて、指導する用具、材料が高度なものになり、題材も具体的な日用品を作成するように設定されており、将来の職業生活への準備としての活動が多くなる。

III. 滋野小学校における田村一二の実践

滋野尋常小学校の特別学級における田村の教育方針は、生活を指導することであったが、この生活指導の考えは田村の対象児観、児童の実態から考え出されていたと考えられる。また田村は、「日常の職業生活に支障をきたさない程度の知識を教えること」、「朗らかにすること」の二つを教育目標として挙げている(田村, 1936)。各教科を見ていくと、滋野特別学級においても、「修身」、「国語」、「算術」、「体操」、「図画」、「唱歌」、「裁縫」については、通常学校

と同様の教科名で授業が行われており、一方で、「国史」、「地理」、「理科」、「手工」の教科は設定せず、通常教育にはない、「郷土科」、「作業」という特別な教科を設定し、実践を行っていた(田村, 1941)。修身科においては、日常生活の訓練、道徳的な判断力を身につけることについて指導が行われていた。道徳的な判断力を身につけさせることや、道徳的な情操を養う指導については、児童の実態から主に教科の時間外に、偶発事項を取り扱い、繰り返し指導することで習慣化させようとした。算術科では、日々生活して行く上で必要な知識を反復練習によって作業を通じて習慣化することを目的とし、「実物を使って数える練習」、「お金の計算」、「時計の読み方、時間感覚の陶冶」、「計量器を用いての実測」など、最低限生活に必要な数的知識・技能を選別し教育を行っていたことが考えられた。作業科の時間には、働く習慣を身につけ将来の職業生活への基礎的陶冶と共に共同作業、団体訓練を多く設定し協調性を育むことを目的とした内容を多く取り扱っており、他の教科と関連性の強い内容が多く含まれている。また、児童の知的発達に応じて仕事の難易度を設定し、活動が行われていた。

IV. おわりに

通常学校と滋野特別学級の教育内容を比較すると、通常学級と特別学級の教育内容は共に、生活に必要な事柄が指導内容とされていた。通常学級においては、6年間の義務教育の終了後、社会に出て働く児童が多く、教科の内容に卒業後の職業生活に必要な事柄を設定する必要があったことが考えられた。滋野特別学級においても、児童の実態と卒業の職業生活を考え、生活を重視した内容が取り扱われていた。そのため、通常学級、特別学級の両方において実学主義が強く、教科の考え方として、児童の生活が重視されていたと考えられた。こうした生活を重視した内容が取り扱われていたために、滋野特別学級では、児童の実態に合わせて「郷土科」「作業」といった教科を合わせた指導を行うことが可能であったと考えられる。また滋野特別学級では、生活を重視した学習活動内容を取り扱い、各教科指導の全般において、作業を通して理解させる指導形態がとられていた。つまり、滋野特別学級においては、作業を活動の中核として位置づけ、知識・技能を汎用化させる指導形態をとっていたことが特徴的であることが示唆された。

【文献】

- 藤波高(1988)とり残された子らの京都の教育史. 文理閣.
- 杉田裕(1968)精薄児の教育法について. 精神薄弱児研究, 121(10), 74-79.
- 田村一二(1936)精神薄弱児の生活の指導. 京都市滋野尋常小学校.
- 田村一二(1941) 缺は切れる. 京都市教育学務課.
- 山田明(1987)『『伸び行き子供』 解題-東京都師範付属小学校第五部の教育実践と後藤綾子-』児童問題史研究会現代日本児童問題文献選集, 19, 日本図書センター.

(ICHIKI Ryouta, YONEDA Hiroki)